

そしてその翌日には「これ以上嘯まれないように」とアンジェローバを持つてきてくれました。虫よけにもなるし、体力が必要な森での活動で火照った筋肉や、強張った関節を癒してくれるから、と。結局、環境調査での現地生活は延べ200日に亘りましたが、現地での生活においてこの二つのオイルを手放したことは、片時ありませんでした。さて、組合が解散し独自路線を模索し始めたころに話を戻しましょう。

アマゾンでは古くから日本移民の歴史があり「ジャポネーズ、ガランチード(日本人は信頼に足る)」という言葉もあるほど。勤勉で協調性を重んじる日本移民を代々見てきたアマゾンの民は、「日本人となら、一緒に仕事しても大丈夫」という大まかな共通認識があったのですね。ですから現地の方々は、血縁者でもない私や家族に大変親切にしてくれました。一方で「日本から来たビジネスマンに森が坊主にされるぞ」などと根も葉もない悪い噂に悩まされた時期もありました。こういった意見も、現地の方から見ればもともな話かもしれませんが、ですから、まずは直接関わる人間と信頼関係を育ててゆくことを大事にしました。お金は約束の金額を、約束日につかり払う。子どもたちへの教育支援を続ける。成功するかどうかは一旦置いて、言ったことは必ず実行する。当たり前前のごとですが、こういった積み重ねが今日を作ったのです。今では現地の仲間の息子たちと、私の息子たちが共にアマゾンの森を守る仕事をしている。アマゾンと日本で、世代を超えて続いてゆくものを作れたことが、何よりもの宝物です。

独自路線が徐々に仕事として形を成しはじめたころには、家族を連れ立ってアマゾンに移住してから5年が経過していました。息子たちも義務教育というシステムから随分と遠ざかっていたので、そろそろ日本に戻ってみるかな、と。98年ごろですね。九州の大分県別府市に一軒家を借りて自宅兼本社とし、全国あちこちでイベントやセミナーを開催してコバイバマリマリのことを知っていた。くための活動に奔走しました。国内はもちろんですが、毎年ブラジルと日本を行ったり来たりしながら一人、またひとりと友達をつくって、この仕事に関わってもらいました。アマゾンへ訪れる以前は、私は農家で畑が現場でしたので商品の製造や販売に関しては素人でした。一方で、友達をつくることは得意だったように思います。各分野で識者を頼って協力を得ることで、少しずつコバイバマリマリが広がっていききました。

現代ではテクノロジーの力を得て広報・営業活動は大きな進歩を遂げているように思いますが、私自身の当時の活動を振り返るに「心」と「足」で培ったと言えるでしょう。2001年に産声をあげ、樹が年輪を重ねるように少しずつ広がったコバイバマリマリの輪は今日まで実直に成長を続けてくれました。大げさな広告やコーマーシャル等に一切頼らず、すべては愛用者様が大切なお友達やお仲間、慈愛と友情をもって手から手へと伝えていただいた御蔭です。やがて、様々な媒体にも取り上げていただき、ビジネスとしてはまだ未成熟かもしれませんが『知る人ぞ知る本物』と成ることができました。

これから、どんどん世界の生物・植物資源は減少し希少

化してゆくでしょう。それは火を見るよりも明らかです。故に、地球一丸となって皆で幸せを追求する仕組み作りが急務です。共有・共存を基盤とした、人類規模での信頼関係を築かねばなりません。では、どうすれば皆が幸せに生きてゆけるでしょうか？このように考え、思いを巡らせることは、祈ることに似ています。ここから、始めましょう。その胸に祈りが灯るとき、「私」以外の森羅万象に尊厳ある命が宿っていることに気がきます。気付いたならば、あとは貴方の直観に従い、貴方の尊厳ある命を全うするだけ。誰かの、何かの尊厳を傷つけるものには、貴方の時間やお金を注ぎません。誰かの、何かの尊厳を守り育むものには、愛を注ぎましょう。大事なことは、参加すること。『私は参加しているんだ。』そう自負すること。傍観者ではなく、冒険者になりましょう。別にアマゾンまでゆかなくとも、子どもの頃のように、勇敢で誇り高い冒険者のこころを持つ、それだけです。

さあ、次の10年、20年はどんな時代になるでしょうか。私たちのユートピアを目指して歩み、草木をかき分けながら一緒に、冒険してゆきましょう。



吉野 安基良(よしの あきら)  
株式会社サポートジャングルクラブ創設者・会長。  
1950年生。株式会社サポートジャングルクラブ  
会長。92年、ブラジル地球環境サミットにNGOグ  
リーンハート団長として渡伯。以降、アマゾン原住  
民の協力のもと、フェアトレードを通じ現地教育  
支援・森林保護・伝統文化保護活動に従事する。著  
書に『グレート・シャーマン(2011年 たま出版)』他